

## 外国人の方言学習をめぐる考察

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 森 由紀  |
| 雑誌名 | 三重大学日本語学文学  |
| 巻   | 6   |
| ページ | 122-109   |
| 発行年 | 1995-06-04  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10076/6494">http://hdl.handle.net/10076/6494</a> |

# 外国人の方言学習をめぐる考察

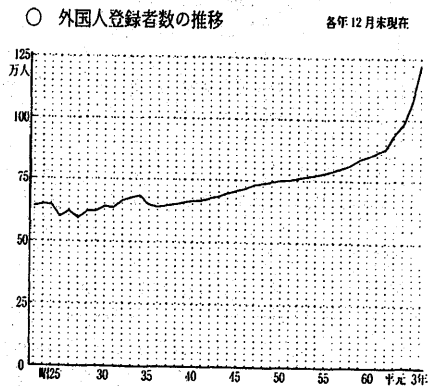
森 由 紀

## 1. はじめに

近年、外国人に対する日本語教育の上でも、方言をめぐる取り扱いが注目されつつある。これは、まず第一に、地方で生活する外国人が、ここ数年のうちに急速に増加したことが大きく影響していると思われる（右下グラフおよび次頁表1参照）。さらに第二には、従来の日本語教育で主として取り上げられてきたいわゆる標準語を中心とする教材の開発が多方面ですすめられ、生活語としての方言にも目が向けられるゆとりが徐々にみられるようになってきたという点があげられよう。第一点は、方言学習に対する必要性へとつながり、第二点は、方言学習を支える現場の可能性に起因する動きと関わる。それら二つの要因が絡み合って、日本語教育の場でも方言に対する認識が広まってきたといえる。

第一の点について詳しく分析すると、表1に示されているとおり、全国的にみても三重県においても、平成2年から3年にかけての外国人登録者数の増加率が最も著しい。とくに国籍別の内訳に注目すると、ブラジルからの来日が前年に比べ3倍近い伸びをみせていることがわかる。当時、中南米から出稼ぎにくる日系人（注1）が関東一円や東海・関西の都市近郊に目立って増えはじめ、来日して働く本人ばかりでなく、その家族、殊に子弟の教育について小中学校等の場でも対応が求められるようになった。

注1) 日系人の場合、「日本人の配偶者若しくは民法による特別養子又は日本人の子として出生した者」ないし法務大臣により認められる「定住者」として在留資格が与えられることとなっている。この資格で入国した外国人は、日本での活動・就労に対する制限がなく、他の外国人には禁じられている単純労働であっても従事して差し支えない。



グラフ1: 『新しい外国人登録法』(後掲)より

(2)

参考資料  
(表1)

外国人登録者数の推移

(単位：全国・千人、三重県・人)

| 調査<br>年月日      | 総 数    |        | 韓国または朝鮮 |        | ブラジル   |        | 中 国   |       | フィリピン |       | ペル -  |        | そ の 他 |       | 増 加 率 |      |
|----------------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|------|
|                | 全 国    | 三重県    | 全 国     | 三重県    | 全 国    | 三重県    | 全 国   | 三重県   | 全 国   | 三重県   | 全 国   | 三重県    | 全 国   | 三重県   | 全 国   | 三重県  |
| H 5 .<br>12.31 | -      | 18,688 | -       | 8,151  | -      | 6,320  | -     | 1,257 | -     | 748   | -     | 888    | -     | 1,324 | -     | -    |
|                | -      | -      | -       | (43.6) | -      | (33.8) | -     | (6.7) | -     | (4.0) | -     | (4.8)  | -     | (7.1) | -     | -    |
| H 4 .<br>12.31 | 1,282  | 17,229 | 688     | 8,275  | 148    | 5,464  | 195   | 1,071 | 62    | 635   | 31    | 694    | 158   | 1,090 | 5.2   | 12.2 |
|                | (1.34) | (53.7) | (48.0)  | (11.5) | (31.7) | (15.2) | (6.2) | (4.8) | (3.7) | (241) | (4.0) | (12.3) | (6.3) |       |       |      |
| H 3 .<br>12.31 | 1,219  | 15,353 | 693     | 8,377  | 119    | 4,218  | 171   | 744   | 62    | 637   | 26    | 508    | 148   | 869   | 13.4  | 28.5 |
|                | (1.26) | (56.8) | (54.0)  | (9.8)  | (27.5) | (14.0) | (4.8) | (5.1) | (4.1) | (2.1) | (3.3) | (12.1) | (5.7) |       |       |      |
| H 2 .<br>12.31 | 1,075  | 11,944 | 688     | 8,359  | 56     | 1,559  | 150   | 639   | 49    | 510   | 10    | 160    | 122   | 717   | 9.2   | 15.5 |
|                | (1.11) | (64.0) | (70.0)  | (5.2)  | (13.1) | (14.0) | (5.3) | (4.6) | (4.3) | (0.9) | (1.3) | (11.3) | (6.0) |       |       |      |
| H 1 .<br>12.31 | 984    | 10,340 | 682     | 8,281  | 15     | 521    | 137   | 555   | 39    | 406   | 4     | 74     | 107   | 503   | 4.6   | 8.1  |
|                | (1.05) | (69.3) | (80.1)  | (1.5)  | (5.0)  | (13.9) | (5.4) | (4.0) | (3.9) | (0.4) | (0.7) | (10.9) | (4.9) |       |       |      |
| S 63.<br>12.31 | 941    | 9,563  | 677     | 8,270  | 4      | 123    | 129   | 501   | 32    | 201   | 0.9   | 1      | 98.1  | 467   | 6.4   | 3.8  |
|                | (1.02) | (71.9) | (86.5)  | (0.4)  | (1.3)  | (13.7) | (5.2) | (3.4) | (2.1) | (0.1) | (0.0) | (10.4) | (4.9) |       |       |      |
| S 62.<br>12.31 | 884    | 9,211  | 674     | 8,319  | 2      | 33     | 95    | 412   | 25    | 150   | 0.6   | 0      | 87.4  | 297   | 2.0   | -0.1 |
|                | (1.04) | (76.2) | (90.3)  | (0.2)  | (0.4)  | (10.7) | (4.5) | (2.8) | (1.6) | (0.1) | (0.0) | (9.9)  | (3.2) |       |       |      |
| S 61.<br>12.31 | 867    | 9,218  | 678     | 8,446  | 2      | 25     | 84    | 379   | 19    | 118   | 0.6   | 0      | 83.4  | 250   | 1.9   | -2.1 |
|                | (1.06) | (78.2) | (91.6)  | (0.2)  | (0.3)  | (9.7)  | (4.1) | (2.2) | (1.3) | (0.1) | (0.0) | (9.6)  | (2.7) |       |       |      |
| S 60.<br>12.31 | 851    | 9,418  | 683     | 8,725  | 2      | 21     | 75    | 336   | 12    | 77    | 0.5   | 0      | 78.5  | 259   | 1.1   | 2.5  |
|                | (1.11) | (80.3) | (92.6)  | (0.2)  | (0.2)  | (8.8)  | (3.6) | (1.4) | (0.8) | (0.1) | (0.0) | (9.2)  | (2.8) |       |       |      |
| S 59.<br>12.31 | 842    | 9,189  | 681     | 8,554  | 2      | 16     | 70    | 284   | 11    | 54    | 0.5   | 0      | 77.5  | 281   | ***   | ***  |
|                | (1.09) | (80.9) | (93.1)  | (0.2)  | (0.2)  | (8.3)  | (3.1) | (1.3) | (0.6) | (0.1) | (0.0) | (9.2)  | (3.1) |       |       |      |

平成5年12月末は国際課調べ、その他は法務省入国管理局調べ

( )内総数は、三重県の全国に占める割合、国別は、全国・三重県を100としたときの構成比

三重県知事公室国際課編『平成5年度国際課事務概要』より

日系人の来日が急速に増加した最大の原因は、労働力不足を補うための特例として平成2年に行われた入管法（正式名称「出入国管理及び難民認定法」）改正がきっかけとなっていることに一言触れておきたい。改正内容は、前記の注1）に述べたとおりである。

「定住」という特別の在留資格の付与によって、定住者となった日系人は、3年間の滞在期間が認められ、求職・就職はもちろんのこと、転職も自由である。南米から来日している日系人は、主として二世、三世にあたる世代で、ピーク時には、20万人を超えたともいわれている。現在、少なく見積もっても15万人は下らないであろう。自動車産業の下請け企業や建設業の現場作業、福祉施設での高齢者介護等に従事しているケースが多い。中部圏で例をあげれば、愛知県豊田市・三重県鈴鹿市に自動車メーカーがあるところから、部品の組み立てなどを中心とした部門で働いているようである。最近の問題点は、不況の波を真っ先に受けて解雇され、不利な仕事に就かざるを得ない場合が増えてきたことであろう。また、日本で生活する同伴家族の“ことば”の問題も見逃せない。特に学齢期にある児童・生徒においては、在日年数が増すにつれて日本語は習得できていくものの、母語や母国の文化・習慣を忘れてしまいがちである。ボランティア団体によっては、母国語への配慮もしながら、バイリンガルの能力を維持できる援助を行っているグループもあると聞く。

日本人のブラジルへの移民は、1908(明治41)年、783名が笠戸丸によって神戸を出発したのが始まりである。移民の厳しい状況は、石川達三の『蒼氓』『南海航路』『声なき民』といった一連の作品群にも詳しく描かれている。昭和10年4月に発表された『蒼氓』は、その社会性・写実性が評価され、第1回芥川賞の受賞作となった。初期の移民者たちは、一種の奴隷に相当する存在として位置づけられ、過酷な労働を強いられていた。その後、日系人は、子弟の教育に力を注いだ結果、社会的に重要な役割を担う地位で活躍する人材を輩出するに至っている。ところが、昨今のブラジル経済の悪化で、移民とは逆ルートの日本への流入が目立ちはじめた。日系人のいわゆる‘デカセギ’という形での里帰りに対し、多くの場合、快適な環境が提供されているとはいえない。精神的にダメージを受けた日系ブラジル人の出稼ぎ者に関する症例報告（注2）を通して、その現状の一端を垣間みることができる。

注2) イチロウ シラカワ・イサム ナカガワ「日系ブラジル人の出稼ぎ者とその精神疾患について」の中には、調査対象の受診者62名のうち、66.1%は日本語を話すことができ、20.9%に日本語の読み書き能力が認められたことが示されている。この点を分析して、報告は、「患者の大部分が日本

(4)

語を理解しているにも関わらず発病するという事は、このような不適応は言語力のいかに、社会—文化的要素によって起こるものであることを示唆している。」(後掲参考文献9—10頁)との指摘がある。

たしかに、そういった側面も大いに影響しているかもしれないが、言語的側面にもう少し分析を加えることを許していただけるなら、日系労働者の場合、多くが地方に住んでいることを考慮に入れると、方言の理解度との関わりも出てくるのではないかと思われる。また日本人と変わらぬ風貌を持ちながら、現代の日本語からはいささか時代遅れの語彙や表現を使って周囲から失笑を買い、コミュニケーションへの自信を失うという場合も見受けられるようである。

## 2. 国語教育における方言

外国人に対する方言指導のあり方を考察するにあたって、ここでは、従来国語教育において方言がどのように扱われてきたかという点について概観しておくことにする。

いわゆる標準語といった概念との対比において、方言をめぐり何らかの言及がみられるようになったのは、明治に入って中央集権国家への歩みが始まるからのことと考えられる。政治的社会的制度の統一と足並みを揃えるように、学校教育の個々の面にわたっても、全国的に統一された制度を採用する動きがみられるようになった。言語教育の観点からみていくと、明治17(1884)年、三宅米吉(注3)は、「くにぐにのなまりことばにつきて」(『かなのしるべ』所収)において、人々の交流を進めることによって、お国訛りを中和させ、自然にことばの統一をはかっていく必要があるという考えを示した。

明治20年頃には、より激しく方言に批判的立場をとる「方言撲滅運動」が起り、その後長らく学校教育現場を中心として、支持されるに至った(注4)。「方言改良論」(明治21年)を著した青田節は、日本の文明開化の一助として、方言の改良を唱え、全国至るところに「正当ノ言語」を普及せしめるべきだとした。教育の現場では方言を使用した者に対し、「方言札」や「方言票」などの罰則を定め、心理的圧力を加えることによって、方言の使用を押さえようとしたが、反発や摩擦も激しかったようである。近代化が進むほど、このような方言否定、標準語奨励の傾向は強まった。井上ひさしの『私家版日本語文法』(新潮文庫版23頁～)によれば、東北の国民学校の一例として、朝礼の際には「口の体操」と呼びならわされた方言矯正のための時間が組まれていたという。なお、「標準語」という用語が使われるようになったのは、岡倉由三郎著の

『日本語学一斑』(明治23年)においてであると認められる。これに対し、「共通語」という用語は、昭和26(1951)年に国立国語研究所から出された報告書『言語生活の実態—白河市および附近の農村における』の中で、「標準語」に代わる概念として示されたものである(注5)。すなわち、「共通語」という概念は、ある地域社会の人が職業等の関係で、東京語とは必ずしも一致しないがそれに近いことばを用いる場合をさしている。いわゆる「全国共通語」に相当するものである。その意味で、標準語と共通語をほぼ同じ概念として用いる場合もある。一方、標準語が理想的、規範的な人為性の強いことばであるのに対し、共通語は自然な状態で実在しコミュニケーションに使われている現実のことばと定義し、区別する場合もある。ちなみに「地方共通語」という概念が用いられることもあり、各地域社会どうしの意志疎通を目的として用いられる限りにおいて、事実上存在しているのは、全国共通語ではなく地方共通語であるという考えもある。ただし、その定義は、統一されてはいないようである。独自の名称では、渋谷勝己(1992・日本語教育76号掲載)が、尾崎喜光(1991『新方言学を学ぶ人のために』所収)のモデルを発展させ、公式度の最も高いレベルを「標準変種」と名づけ、全国共通語に相当するものとして位置づけている。

さて、戦後の国語教育において方言がどのように取り扱われてきたか、「小学校学習指導要領」に沿って、見ておきたい。まず、昭和22年には、「なるべく、方言や、なまり、舌のもつれをなおして、標準語に近づける。」(国語科編第一章まえがき)、「できるだけ、語法の正しいことばをつかい、俗語または方言をさけるようにする。」(第三章小学校四、五、六年の国語科学習指導)と掲げている。また、昭和26年には、先の国立国語研究所の報告書に著された「共通語」という表現が早速用いられている。ただ、その内容は、なお方言矯正の延長線上にあり、大きな変化は認められない。やや変化が現れるのが、昭和33年の学習指導要領で、第四学年の一節に、「全国に通用することばとその土地でしか使われないことばとの違いを理解すること。」、第六学年に「必要な場合に全国に通用することばで話すこと。」(下線筆者)とある。さらに、昭和43年になると、第四学年の項目の一つに、「共通語と方言とでは違いがあることを理解し、また、必要な場合には共通語で話すようにすること。」とうたわれるようになる。この昭和43年の表現は、現在、下線部が「必要に応じて」と書き換えられ、方言と共通語の自在な使い分けを推し進める流れにつながっている。このような傾向の萌芽は、遡れば、昭和15年に琉球方言をめぐって、柳宗悦率いる日本民芸協会が主張した立場(注6)にも、既にうかがえる。

最近の小学校教科書の中から方言を扱っている教材を取り出してみると、たとえば、光村図書の『国語 四下 はばたき』(平成四年版)には、『方言と共通

語』(斎賀秀夫)の一文が取りあげられている。結びの部分で、「方言を使ったほうが自分の気持ちをよりはっきりと伝えられる場合には、方言を使ったほうがいいでしょう。しかし、相手が方言の通じない人だったら、共通語を使わないと、自分の言いたいことを伝えられません。大事なのは、相手を思いやることと、自分の言いたいことをうまく伝えようとする気持ちなのです。」(注7)と締めくくっている。そこでは、かつての方言排斥の傾向はすっかり姿を隠し、人と人との伝達を軸とした方言の再認識・再評価へとつながる流れがみうけられる。また、教科書の中には、方言を使った学級新聞づくりを提案しているものもある。このような積極的方言受容の指導方針による影響か、福島県の中学校では、民話や文学作品を自分達の暮らす地域の方言(会津弁)で書き直す作業を試み、改めて身近なことばの温かみを再発見したという報告が紹介されている(注8)。

注3) 三宅米吉(1860-1929)は、紀伊生まれの考古学者・教育学者。日本考古学会を創設主宰した。

注4) 都築(1995)によれば、昭和40年代でなお、「方言は使わないように…」との指導が行われていたという。

注5) 『小學讀本便覧第3巻』(338~339頁)には、「通語」という語形がみられ、現在の全国共通語と同じ意味あいでも用いられているようである。

注6) 沖縄の標準語教育は、過重ともいえる内容で、昭和15年年明け早々から1年近く方言論争が巻き起こったと伝えられる。県学務部の「県民の劣等感を取り除き、明朗闊達な言語生活を行うためには、標準語奨励が必要」とする意見に対し、日本民芸協会側は、「標準語も琉球方言も共に国語として尊重されるべきものであり、公用語である標準語の習得はもちろんであるが、その教育の行き過ぎによって方言が抑圧されてはいけない」と訴えている。

注7) 本文に引用した部分は、現在採用されている教科書からの抜粋である。もう一期前の検定済教科書(平成元年版)では、同じ筆者の文であるが、「方言と共通語のそれぞれの長所を生かして、時と場合によって、自由に使い分けられるように努めたいものである。」となっており、表現が微妙に異なっている。現行の教科書のほうが、お互いの気持ちを伝え合うための手段として、より積極的に方言の存在を肯定していく印象が強く伝わってくる。

注8) 朝日新聞天声人語(1995年4月15日付け朝刊)参照

### 3. 日本語教育における方言

ここからは、日本語教育において方言がどう扱われてきたか、教材との関わりでは方言をどのように取りあげた例があるかについて触れ、さらに筆者が行った講読クラスでの試みを紹介するとともに、日本語学習者にとって方言はどのように位置づけられるのかを考察してゆきたい。

#### 3. 1. 日本語教材に取り上げられた方言

日本語教育においても方言への取り組みが目ざされはじめていたといえるものの、具体的に方言を取りあげた教材の数は、まだまだ少ない。当初、日本語教育が、標準語ないし全国共通語のみを対象としてきたのも、国語教育での方言に対する態度が少なからず影響を及ぼしていたと考えられる。そのような中で、伴(1984)は生活語としての方言の位置づけを提唱した。すなわち、「日本語学習者は話しことばの中ではふつう体のみならず生活語彙や方言が理解できなければ日本語での疎通に問題を起しやすい。」との視点に立ちつつ、80年代後半から、日本語教育における方言への取り組みが徐々に現れてきた。

といっても、教材として方言のみを単独で扱った例はまだ目にしたことがない。主教材の中に部分的に方言を取りあげ教材化した例がほとんどかと考えられる。たとえば、1988年刊(1990年改訂)の『SPOKEN JAPANESE VOLUME2』(AKP同志社留学生センター)は、最後の課に「方言と標準語」というタイトルで、解説文を添え、京都を中心とする関西弁の練習を取り入れている。また、1989年の長崎総合科学大学『別科・日本語Ⅰ』では、巻末に(参考)として、「長崎でよく使われる言い方」の例文がまとめられている。その中には、「イクデス/タベルデス」のような、共通語に照らし合わせると文法的に誤用に相当するような語形も含まれている。このような表現は、自然習得のみにまかせず、教室である程度体系的に取りあげておくほうが、共通語への「方言干渉」(注9)を防ぐ上で有効であろう。

名古屋大学大学院では、1992年度の日本語教育実習の一環として、名古屋弁のモジュール教材が作られている。語彙と例文のテープが準備され、AET(英語科指導助手)を対象に講義形式で授業を行ったとの報告がある。他に、教材ではないが、名古屋国際センターで外国人向けに発行されている「なごやひらがなしんぶん」25号(1994.9)、26号(1994.12)、27号(1995.3)掲載の「日本語いろいろ日本語の話9~11」には、名古屋弁の特徴が紹介されている。

注9)「方言干渉」(Dialectal Interference)は、ダニエル・ロングが、第二言語でいう「言語干渉」にならない、「学習者が日常生活で耳にする、在住



(8)

地域の生活言語（関西なら関西弁）による標準語への影響」と定義した。  
(1992・日本語教育76号掲載)

### 3. 2. 日本語講読における試み

三重大学一般教育(1995年度より共通教育)の留学生対象科目として日本語・日本事情は8コマ開講されているが、そのうち日本語講読は、随筆を扱うものと文学作品を扱うものの二通り設けられている。筆者は、後者の文学作品を扱う授業を担当しているが、1994年度後期には、清水義範の小説『蕎麦ときしめん』の一部を教材として、名古屋弁を含めた方言について扱ってみた。教材として取りあげた部分は、名古屋出身のタレントに対する名古屋人の態度や東京の街並みに対する名古屋人の反応を描写した部分で、名古屋弁の会話が12ヵ所にわたって含まれている。授業では、作品の会話表現の中から、方言の特徴をもつ言い回しを拾わせ、普段耳にしたことがあるかどうか、三重弁ならどんな言い方をしているか等を各人にチェックさせながら意味を確かめていった。履修者は、学部生6名、研究生6名で、80%が中国系である。読了後、レポートを提出させた。その中の一部を次の項で紹介しておきたい。

### 3. 3. 留学生から見た方言

まず、中国出身の留学生が多かったことから、中国の方言と日本の方言を比べて取りあげた者が目立った。相違点、共通点ともに言及されているが、いずれの学生も最も大きな違いとして、中国語は、文字で書けばたいに通じるのに、会話になると地方が異なれば全く通じない点を指摘していた。共通点としては、同じ方言を話す者どうしには同郷意識が生まれ、方言が理解できない者は地域社会から疎外されやすいという点があがっていた。この点は、外国人として日本で生活する場合にも意識され、「私たちが使う日本語は、標準語なので、相手にどこか堅苦しく感じさせて、なかなか友達みたいに暖かい雰囲気を作れません。」と書いている学生もいる。また、他の国籍の学生(トルコ)も、自分の国との比較を試み、方言の言葉そのものについてはないが、作品の中にあられた地方人の劣等感の裏返しは、自国と全く変わらないと述べていた。その他、日本の東西文化の対立を中国の北京と上海の対抗意識になぞらえた考察もあった。

日本語の方言そのものを観察した結果としては、津市においてもたびたび名古屋弁が耳にされることから、名古屋弁を三重弁だと思って聞いていた留学生もいる。また、方言独特の言い回しであるにもかかわらず、共通語とおなじ語形であると誤解して、意味を取り違えてしまった例(注10)、類似の音から

連想して既知の語彙に当てはめ、誤った類推を行ったケース(注11)が見受けられた。

注10)「～だでしょう」を「～の様で」と受け取ったり、「～知っとるもので」「田舎臭いで」「すげえで」の文末を「～です」の省略と捉えていた。

注11)「いかすきゃあ」を「いかないか」と理解した例、「おらん」を「おらない」、「いかん」(「だめ」の意)を「いかない」とした例もあった。

#### 4. 外国人の方言使用に対する日本人の意識

日本語学習者にはいかなる方言を指導すべきか、教材として扱うにはどのような提出順でいずれの項目を提示していくべきなのか、主教材との関連をどう位置づけるか等まだまだ研究の積み重ねを要する点が多々ある。そのためには、日本語の方言そのものに関する基礎的研究はもちろんのこと、外国人の方言習得に寄与する応用的研究が待たれる。また、併せて学習者の側からのニーズも分析してゆく必要があろう。さらに外国人が方言を用いることに対して日本人がどのような意識を持っているかについても配慮しておく必要があるのではないだろうか。この点を調べておきたいと考え、日本人に対して簡単なアンケート調査を行った。

今回調査に協力してもらった日本人のグループは二通りあり、一方は大学生36名、他方は一般成人34名の合計70名である。前者の大学生は、三重大学人文学部文化学科で1994年度後期に開講した日本文化コースの総合科目、「日本文化一東と西一」の履修者(学部2,3年生)を対象とした。後者の一般成人は、三重県国際交流財団が社会人向けに実施した日本語指導者養成講座の受講生で、世代は、平均してほぼ40代、年齢分布の幅は10代から70代に及んだ。なお、大学生のグループにも、社会人特別選抜による入学者で30代～50代の学生が数名含まれているが、平均値は20代におさまった。以下に設問ごとにまとめた調査結果を示しつつ、考察してゆきたい。

##### 1) 出身地について

|      | 三重 | 愛知 | 岐阜 | 京大 | 東京 | 千葉 | 神奈川 | 静岡 | 岡山 | 梨長 | 野奈 | 岡山 | 愛媛 | 外国籍 | 計  |
|------|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|----|
| 大学生  | 9  | 17 | 2  | 2  | 0  | 1  | 0   | 1  | 0  | 1  | 1  | 0  | 1  | 1   | 36 |
| 一般成人 | 24 | 3  | 0  | 1  | 2  | 0  | 1   | 0  | 1  | 0  | 0  | 1  | 0  | 1   | 34 |
| 合計   | 33 | 20 | 2  | 3  | 2  | 1  | 1   | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 2   | 70 |

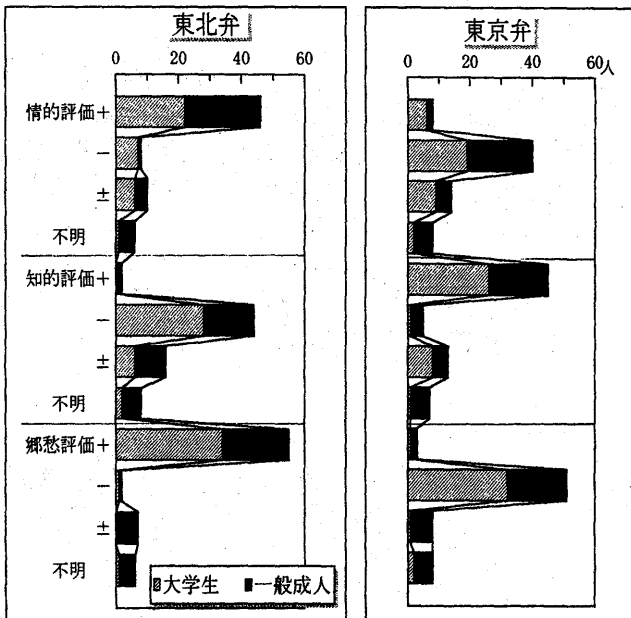
(単位は人)

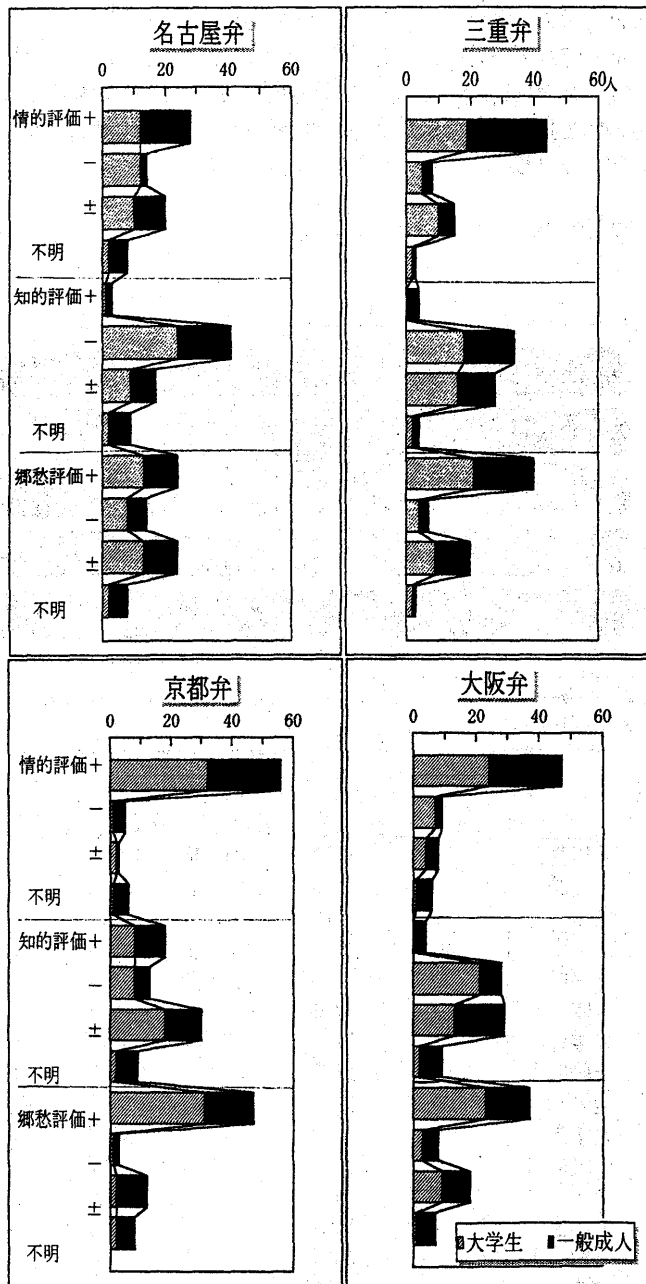
(10)

生まれは、地元三重の出身者が全体の50%弱を占めている。愛知・岐阜・三重の東海3県を合わせると、80%近くに達する。また、育成地について小中学校時代主にどこで過ごしたかを問うたところ、多少なりとも三重に住んでいたという回答がちょうど半数あった。東海3県で育った者は合わせて80%を超える。他の地域としては、前掲の出身地に兵庫・広島が加わる程度で、ほぼ変わらない。なお、外国籍の内訳は、中国（台湾）及びブラジルである。

## 2) 方言のイメージ評価について

方言に対してそれぞれどのようなイメージをもっているか調べた。項目の設定にあたって井上史雄(1989)による方言イメージのパターンを参考にし、情的・知的・郷愁感の有無を+(あり), -(なし), ±(いずれでもない)で答えてもらった。調査対象として東北・東京・関西の他、三重・名古屋の方言に対する評価も加えた。回答者の‘情的’をめぐり理解のズレが影響した部分もあったかと懸念するが、東北弁と東京弁の情的評価の面では先行の分類結果(前出井上198頁の表)との違いが顕著に見られる。距離的に隔たった地域のことばに対しては、マイナスイメージが軽減される場合もあろうかと推測できる。また、京都弁は知的面で中立とする評価が多かった。この点も、先行調査が「郷愁評価が常に知的評価の逆を向く」と仮定しているのと、異なる分布となっている。ただし、今回は、多変量解析による処理を経ていないので、先行の結果と無条件に比較することは避けた。以下、結果をグラフにて示す。





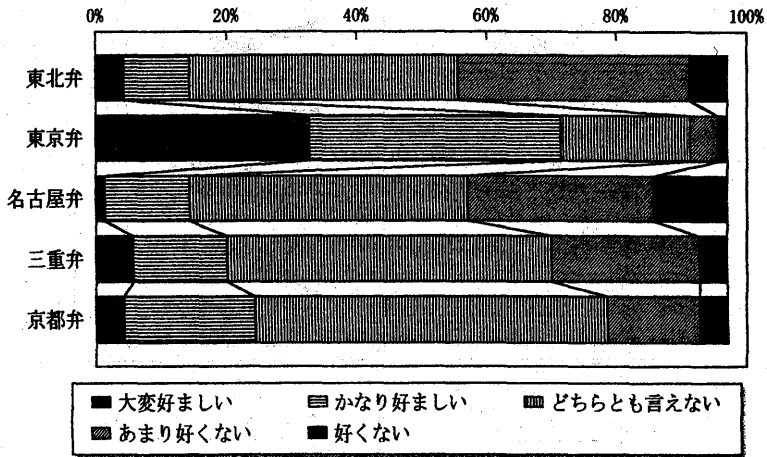
(12)

### 3) 外国人と方言の関わりに対する日本人の意識

外国人がそれぞれの方言を使った場合、どのように感じるかを訊ねた結果が、グラフである。東京弁の使用に対しては受容度が高いが、その他の地方は名古屋弁・東北弁の順で拒絶感が強いことがわかる。ただ全体的には、是非いずれとも言えないという立場をとる者が相半ばしている。

グラフ:

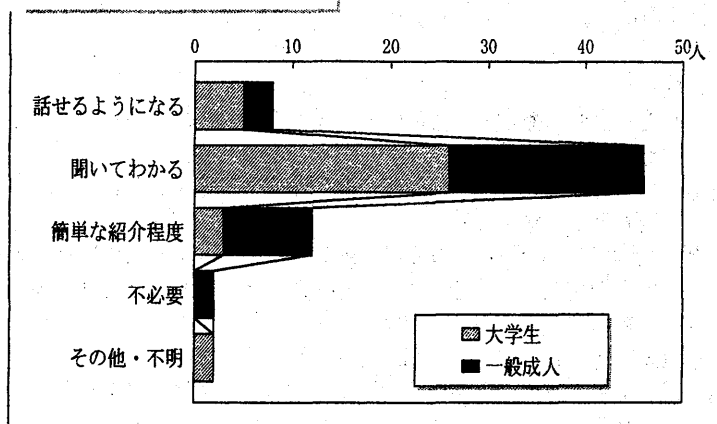
外国人の方言使用について



|      |      | 大変好ましい | かなり好ましい | どちらとも言えない | あまり好まない | 好まない | 不明   |
|------|------|--------|---------|-----------|---------|------|------|
| 東北弁  | 大学生  | 5.5%   | 8.3%    | 41.7%     | 38.9%   | 2.8% | 2.8% |
|      | 一般成人 | 2.9    | 11.8    | 41.2      | 35.7    | 8.8  | 2.9  |
|      | 全体   | 4.3    | 10      | 41.4      | 35.7    | 5.7  | 2.9  |
| 東京弁  | 大学生  | 30.6   | 36.1    | 22.2      | 5.5     | 2.8  | 2.8  |
|      | 一般成人 | 35.3   | 41.2    | 17.7      | 2.9     | 0    | 2.9  |
|      | 全体   | 32.8   | 38.6    | 20        | 4.3     | 1.4  | 2.9  |
| 名古屋弁 | 大学生  | 2.8    | 11.1    | 38.9      | 30.5    | 13.9 | 2.8  |
|      | 一般成人 | 0      | 14.7    | 47.1      | 26.5    | 8.8  | 2.9  |
|      | 全体   | 1.4    | 12.9    | 42.8      | 28.6    | 11.4 | 2.9  |
| 三重弁  | 大学生  | 5.5    | 8.3     | 50        | 27.8    | 5.6  | 2.8  |
|      | 一般成人 | 5.9    | 20.6    | 50        | 17.7    | 2.9  | 2.9  |
|      | 全体   | 5.7    | 14.3    | 50        | 22.8    | 4.3  | 2.9  |
| 京都弁  | 大学生  | 8.3    | 19.4    | 41.8      | 19.4    | 8.3  | 2.8  |
|      | 一般成人 | 0      | 20.6    | 67.7      | 8.8     | 0    | 2.9  |
|      | 全体   | 4.3    | 20      | 54.3      | 14.3    | 4.3  | 2.8  |

さらに外国人が方言を習得するとしたら、どのようなレベルまで身につけるのが適当だと思うかという設問に対しては、グラフ3のように、聞いてわかる程度を目標とする意見が圧倒的に多かった。

グラフ3: 外国人の方言学習について



## 5. おわりに

言語教育の目的は、学習動機に沿ってみれば個人個人さまざまである。しかし、最低限共通する部分を求めれば、メッセージをできる限り正確に伝え、かつ相手からのメッセージを受け取って、コミュニケーションを繋いでいくところに集約しうる。方言もまたその一環として位置づけられるものではないだろうか。たとえば方言形の文末表現が学習者にとって伝達受信の障害となるとすれば、その表現は、より確実にメッセージを受け止めるために、本人にとって必要性の高い学習項目になってくるはずである。

また、共通語との対比において方言をとらえるならば、外国人ばかりでなく、その方言になじみのない日本人にとっても新たな言語文化に接する機会になってくるとも考えられる。その点で、広い意味での多文化を形成しているともいえるであろう。日本語を単一の理想形に固定しようとするとも日本語=標準語のイメージが際だってしまいが、各方言が重なり合いながら包み込まれていると考えれば、現実には、各地域差ばかりでなく世代・性・階層といういくつかの位相によって切り取ることが可能な日本語が、それぞれの場面に応じたあらゆる方で存在していると言うことができるのではないだろうか。日本語教育の入門・初級レベル段階で取りあげられている表現は、共通日本語という観点でと

らえた最大公約数的な日本語であるといつてよい。従つて、ある位相のあらわれ方によっては、理解が阻まれ、伝達を築く上でそぐわない場合もありうる。もしそこで、学習者本人にふさわしい位相で設定された日本語が必要とされるなら、必要性を満たす可能性をさぐり、支援していくのが日本語教師に課せられた役割であろう。

### 【参考文献】

- 第一東京弁護士会人権擁護委員会編(1992)『外国人の法律相談Q & A』ぎょうせい
- 法務省入国管理局外国人登録法例研究会編(1993)『Q & A新しい外国人登録法』日本加除出版
- イチロウ シラカワ・イサム ナカガワ(1994)「日系ブラジル人の出稼ぎ者とその精神疾患について」『こころの臨床ア・ラ・カルト【特集一多文化社会と「こころ」の健康】』第13巻2月増刊号, 星和書店
- 寿岳章子(1988)『ことばづかひの昭和史』岩波書店
- 名嘉真三成(1989)「近代化と標準語教育」『国文学解釈と鑑賞』第54巻7号, 至文堂
- 井上史雄(1989)『言葉づかひ新風景(敬語と方言)』秋山書店
- 徳川宗賢・真田真治編(1991)『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社
- 都染直也(1995)「方言と共通語は共存し続ける」『言語』Vol.24No.1,1月号, 大修館書店
- 伴 紀子(1984)「語学教育の日本語と生活語としての日本語」『アカデミア(文学・語学編)』36, 南山大学
- (1985)「生活語」の教育上の配慮」『日本語教育』56号, 7月号, 日本語教育学会
- アルク編(1988)『月刊日本語 特集・関西弁の逆襲』第一巻第八号, 8月号 日本語教育学会(1992)『日本語教育 (特集)方言と日本語教育』76号, 3月号 国立国語研究所(1993)『方言と日本語教育』日本語教育指導参考書20, 大蔵省印刷局
- 鹿浦佳子(1992)「全国ネット版関西弁と標準語との文法差」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第2号
- (1993)「非漢字圏学習者の関西弁に対する関心」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第3号
- (1994)「関西の大学生の関西弁受容意識」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第4号
- 佐治圭三(1988)「日本語教育における位相の問題」『国語学』154集, 国語学会 [本学教官]